第八章 冬の陣

「承前」にも書いたが、ここで若干の説明をする。

0 旧 陣 暦 通説 で とし 今の季節 では た。 大 坂 余 感 0 程 とは 役 0) は 異な ことがな 二回 る。 あったことにな V この 限 物 ŋ 寒 語 1 で は 0 冬に戦うことは てい 「冬の る。 陣 つま は な 正 り冬の 月 11 前 陣 敵 0 .と夏 将 戦 と戦う前 1 の陣だ。 だ 0 たの に この でこれ 冬将 頃 軍 を 0 暦は لح 秋

1 戦 わ が な け 神 風 れ ば なら に 敗 ない れ た元がそうであったように、 からだ。 冬将 軍 に 敗 れたナポ 自然 レ 才 0 軍 ン æ 隊との勝負は避けるべきだ。 ヒ ットラー、 それに 多将軍 では な

\* \* \*

用心深いな」

「泣くまでまとうホトトギスか」

秋たけなわ 0 大坂 城 天守で秀頼と幸村が冷たい 夜風を受けながら満点の星空から城下 に視線

「完全に天下の台所が復活した」

を落とすと華や

カュ

な

灯

火

が

見える。

「太閤秀吉もだ」

「それに外堀の外側も……」

夏を過ぎて 夜 が 長くなると、 安井道 頓 は 暗 闍 に 紛 ħ Ė 埋 8 立 てら ħ た外 堀 0 土砂 を 運 び 出し

て道 「一石二鳥とはまさしくこのことです」 頓 場を始め 8 張 り巡 こらされ た堀 0 周 辺 を宅地 化し た。 ますます街は栄える。 小

幸村が愉快そうに秀頼を見つめる。

父は 安井道頓をよく可愛が った。 小 猿も彼に親近感を持 っているようだ」

# \* \* \*

た。 小 そんな中で道頓 猿は 護衛されているはいえ、ほとんど毎日のように城下に出て町民と交わるのが好きだっ 堀 の整備に汗を流す安井道頓に近づく。

「これはこれは。ますます秀吉様に似てきましたな」

t の怖じしない 安井道頓が泥だらけの顔で笑うと汚れた手ぬぐいで顔の汗を拭う。

「そんな汚いもので拭いて何になる?」

·猿の言葉は気さくだが格調さも併せ持つようになった。

·わしの顔とこの手ぬぐいとどちらが汚れてい るのか勝負しております」

安井道頓が腹の底から笑うと小猿も負けじと笑う。

「これを使え」

小 猿 が 真 へつ白な 絹 の手ぬぐいを差し出すと安井道頓は遠慮な しに受け取る。

「家宝にします」

安井道頓 ĺ 懐に 収 めると小猿は先ほどよりもっと大きな声で笑う。

「出して見よ

安井道頓はひょうきんな表情で取り出す。

#### 第八章 冬の陣

ありや不思議 !白が黒になってしもうたわ <u>ن</u> ا

小猿が 絹の手ぬ ぐい を取り上げると構わず安井道頓を抱きしめる。

**やめてくだされ!** お召し物が真っ黒になりますぞ」

「構わぬ!名は?」

「安ドンでございます」

「安ドン?奇妙な名だ」

安井道頓は抱き合う小猿の耳元で囁く。

小猿も囁き返す。

お願

いがあります」

「言って見ろ」

・ほかにも堀を造りたいのですが土砂が足りません」

 $\stackrel{ extstyle -}{?}$ 

「分かった」

安井道頓。

ただ者ではない」

小猿

の報告に幸村が即座に決定する。

<sup>-</sup>外堀の土をください」

\*

\* \*

秀 頼 が 笑う。 すでに秀頼は春 の陣で安井道頓を匿ったからよく知 って Ņ

「小猿に任せよう」

「そうは行かない。家康に攻め入る口実を与えてしまう」

いつもは幸村の言うとおりにする秀頼が首を横に振る。

「家康 が 知るところになってもいいではないか。 少しずつ外堀の土を運び出せばい

幸村がハッとする。

「いつの間にか用心深くなりました」

「『小猿に任せること』賛成してくれるか?」

「もちろん!」

幸村が秀頼の両手を取って握りしめる。

動

か

「それにしても小 猿 の成長はすごい。 北政 所も『もう教えることはない』とおっしゃった」

ぬ家康は不気味だ。歳を重ねることを強く意識しているはず。だから先を急ぐと思った」

小 猿が 安 (井道 頓 0 願 いを受け入れて外堀 の土の採取を許可すれば城下の者は驚くはず」

幸村が秀頼から離れる。

つひょ っとしてこれ は安井道頓 0 調略なのでは?そうだとすれば家康の重い腰が 動く!」

も情が深い」

「腕前も一流だ」「確かに安井道頓は父に可愛がられた。しか

## 第八章 冬の陣

「安井道頓を信頼する小猿も大したものだ」

「ここは小猿と安井道頓に任せて我 々 は 家康 の攻撃 に備える準備をしよう」

大坂城を浮 幸村 が 頭を下げようとしたとき先に秀頼 かせるカラクリをお教え しま す。 が頭を下げていた。 緒 に考えまし よう」

\* \* \*

「誠か!」 珍しく家康が大声を出す。

「丁ぺこうらぬりしているこうことに「複数の隠密から同じ報告を受けております」

町民たちも協力しているとのこと」

「秀吉そっくりの、いえ、今や秀吉だと町民は思っているようです」 ここで自分の読みが父より勝っていたと自負する秀忠が進言する。

「出陣しましょう」

しかし、家康は目を閉じる。

じれったそうに返事を待つ秀忠が――何かある

つ秀忠が決心する。

私 家康 は 征 0 夷大将 目 が 開 軍 カ ない。 です。 幕府 に謀反を起こす者は成敗しなければなりません」 幸.

村

は手

強

影武

者

0

お陰で難を免

れ

\_

歩

間違えば徳川家は

消

滅

してい

た

常 Þ 『何としても内堀を』と言われ 7 1 たのに、今や外堀が復活します!」

父上 が 出 陣 L な くとも私が 全軍を率 1 . て大坂: 城を叩きます」

秀忠

0

意見には

説

得

力があ

るし、

理

に

カン

な 0

てい

る

やっと家康 が 目 を開 け Ź。

分かった。 旗本と有力大名を駿府城に集めろ」

「そんな悠長な。 すぐさま軍勢を引き連れ岐阜城に集結させるべきです。 作戦はその後でも遅

くはありませ

一今言ったこと、 秀忠がそう言い切ると側近の者に言い放つ。 旗本、有力大名にすぐ伝えろ」

か し、家康 は 止め はしなかった。 側近 たが、 の者が 消えると高ぶる秀忠を見つめ  $\dot{\tilde{z}}_{\circ}$ 

そ れ は心得てお ります。 今度こそ幸村を討って見せます」

この家康  $\mathcal{O}$ 強 7 言葉 にそれまで元気 1 っぱ いだった秀忠が ひるむ。 家康は周 りに 誰 ŧ V) ない

ことを確認すると秀忠 の耳元で囁く。

一今から言うふたつのことを心得よ」 家康 から征夷大将軍 の職を引き継いだとは言え秀忠にとって父親は絶対だ。

家康が秀忠の右

確

か

に

耳 目 を  $\mathcal{O}$ 裏 細 側 8 を探 な が ら小 る。 さな 家康 ホ は ク 秀忠に重要な話をするとき必ずする行為 口 か 5 短 1 毛 が二本出てい る 0 を 確 カュ  $\Diamond$ で秀忠も心 る。 目 0 前 得 0 7 秀 1 る。 忠 が 家 本 物 康

カン

は

ひとつ。 秀吉 0 生ま れ変わりと言われる猿のような若者はどうも幸村の、 そし て北 政 所 に 操

城下だけでなく京でも人気を集めてい

る

どう

か

確

カコ

め

た

0)

「ヤツはまやかし者。芸者のような存在」

られてい

るとは言え、

大坂

ぎ出 黙って聞 したのじゃ。 け。 t こんな作戦を立てることができるのは幸村だけだ。 ・ツは 秀吉の影武者ではない。 幸村は影武者ではない 侮るな」 本物そっくりの秀吉を担

「ふた つ。 我が 徳 <u>河</u> 一 族は 影武者、 つま り服 部 族 に守られている」

家 康 は 平 常  $\mathcal{O}$ 声 に 戻 0 た 秀忠  $\mathcal{O}$  $\Box$ に 手を当てる。 服

部

半蔵

以

下、

服

部

族

0

献

身的

な

働きに感謝しております」

服部一族は元は伊賀の忍者。声を落とせ」

秀忠 は 納 得 できな 1 表 情 を家 康 に 向 け

幸村 豊臣 だけ が 敵 では ない。 服 部 半 蔵 に裏切ら ħ たら 徳川 家 は簡 単 に崩 壊する」

「えつ!」

幸 家康 の片手が 口を封じていたので秀忠の驚きは声にはならなかった。 第八章 冬の陣

> 再 び 秀忠は 驚くが 冷静さを取 り戻 してい

1

大坂

城は恐ろし

ر را

城だ。

何としても内

堀

でも埋め

たか

ったが、

そんなことは大したことでは

な

出 陣 は ?

家

康

は

相

手

0)

すべきではないと思った。それは『蘇った』という秀吉の素性がまったく分からない 性格を研究し尽くしてから作戦を立てる癖が か すれば らだ」

"ある。

分からないまま攻撃

甚大な被害を受けることを身を持って体験 していた。 現に幸村の考え方をよく調べ ずに 戦 った

から何 とか 勝利したとはいえ気分的には 敗北に 近か いった。

動きが 速すぎる。 しかも人気がある。 今 回 |の戦 V は 春 の陣のような影武者対影武者の戦では

ない」

父親 0 言葉 の一つ一つに秀忠 が 頷

今回  $\mathcal{O}$ 出 陣 に際 L て、 服部半蔵 を同行させるな。 後ろから撃たれるか t 知 れ

父上 は ?

「もち Ś W 出 陣す る。 準備 L ろ

秀忠はこれまでと違って家康 が 戦 1 を急ぎ始めたことに驚く。それを察して カ 家 康 が 促

冬をやり過ごしてか ここで秀忠は父親の深遠な思考に気付く。 らと考えて V たが、 そうも行か なくなった。 急がねば。 冬が 来る前

に

岐阜

-城で戦

略会

議

が

開

かれる。

は大坂

城

「大坂は 江戸に比べて冬でも暖 か いというが、 こちらは野営しなければならな

秀忠が家康の次の言葉を先取りする。

「相手は大坂城で寒さを凌げる」

「それなりの装備をしろ」

「心得ました」

\* \* \*

関 ケ原の戦 1 、以降、 世代交代をほぼ終えた東軍の有力大名たちが徳川軍に合流する。 目指す

春 0 陣で の約束を反故にして外堀を復活させている。 明らかな謀反だ」

「聞けば秀吉が復活したと」

どこかで秀吉に似た芸人でも見つけた のであろう。 風評 に 惑わされ るな !

秀忠が活を入れ る。 幸 7) 世代交代を終えていたので昔の秀吉を知る者はわず かだ。

「猿芝居だとおっしゃるのですな」

笑い声があげる。

「油断はできない。秀頼は成長した……」

失礼にも秀忠の言葉を遮る若

い大名が

いた。

た

「過保護で育った秀頼など大したことは

な

家康の鋭い視線がその者に向かう。

「秀頼の後ろには真田幸村がいる」

数少ない長老の大名も同じように厳しい視線を向ける。

家康が頷くとおもむろに口を開く。

幸村を侮

るな。

あや

つは数少ない手勢で大軍を何度も討ち破

いった知

将だ」

お前たちを首にしても味方にしたかった。 何度も寝返りを調略したが、ことごとく退けよっ

家康のにらみが深くなる。

幸村 は秀吉を信奉してい る。 ľ V か。 それ以上に お 前たちは わしに忠実であれ」

「もちろんでござい 、ます。 必ず Ŕ 幸 村の首を取 って見せます。 命 にか けて」

かし、家康は頷かない。秀忠が繋ぐ。

幸

-村だけではな

\ `

外堀

が

復活

すれば大坂城は

再び難攻不落

の城となる。

肝に銘ぜよ」

\* \* \*

家康は大軍を三つに分ける。

に淀川

沿いを下って大坂城に向かう。

第 部 隊 は 京に 入り支配 下にある二条城、 伏見桃山城、 淀城などで兵糧を調達し城兵ととも

- 95 -

部 隊 は、 伊 賀 んを避 けて奈 良 カコ 5 河 内 に 向 カコ 0 て大 坂 城 でを目 指

派 あ 派遣す る 第三 九 度 部 山 隊 場 B は さ 合によっ 大  $\mathcal{O}$ 口 付 ŋ 近 L て て紀 で は 石 堺に Ш 伊 国 本 ·願寺 進 に 軍 向 と交流 L カン 第二 う。 一部隊 ただ が あ と合流 し、 0 た 雑 この 賀衆、 して大坂城を目指す。 部 隊 さら は 小 に 規 模だ。 は 根 来衆 幸 を牽 村 巨 大  $\mathcal{O}$ 第 軍 制 団だ す Ź 0 故 カン た らこ め 郷 に で

る。 \ \ \ だが、 方、京や伊賀や紀州 その点をどう対処するか 家康 自身も承知していることだが、 からの情報が幸村 が冬の陣の成否となることも理 の耳に入る。 大軍 は 威 労力は もちろん家康はそのことに気付 解 あ してい るも Ŏ の、 る。 どうしても動 きが てい 鈍

そ三手に分けることができる。

\* \*

\*

l 幸 村 び れ が 秀 が 頼 切れたようだ」 と小 猿 に 微 笑 む。

先 読 4 L て 1 た 幸 村 が大きな 地 図を広げてこれ カ 5  $\mathcal{O}$ 対応を説 明す

Į, V 時 期 だ

正 月 0 儀 式 も終 わ 0 て 城下は 引き締 まっ てい る。 L カ t 今年 は 寒くなるようだ」

暖 な紀 水 軍 州でも大雪になるとい を 擁 す る 雑 賀 衆 か 5 0 情 報 に ょ れ ば 紀州  $\mathcal{O}$ 海 が 例年になく荒れてい る。 こんなときは

温

#### 第八章 冬の陣

頼も

しい意見だ」

雪が 味方になるとでも」

V

ず

ń

は

な

前置きが 長 くなることを嫌って幸村が 地 図を指 し示す。 秀頼とともにい つの間に カュ 存

在感を

増 した小 猿も熱心 に説明を聞く。

「まず、 淀川 を下る徳 頄 軍には舟に穴をあげる程度の攻撃でいい。 舟が沈没すれば後は冷たい

Ш 幸村様

、が始末してくれる」

珍しく小猿が発言する。 幸村が驚きを抑えて小猿を促す。

雪の季節に攻めるのなら、 それなりの覚悟と準備をするはずでは」

「すでに手 L カュ Ļ は 小 猿はそ 打 0 て V れ る 以上意見しない。

幸村が小猿を見つめてからにこやかに応える。

小猿では な く秀 頼 が 首を傾 げ

伏 見 0 酒 !を買 1 占め た

Ĺ が 鈰 1 はず の三好清海 入道が 大声 を あげる。

寒 V 冬は 酒 12 限 る。 その 酒を買い占めてしまうとは」

もちろん、

全部ではない」

- 97

同じで途中で調達しなければならな

得意満面の三好清海入道が幸村に説明を求める

「残ったわずかの酒を徳川軍は取り合いするはず

秀頼が口を挟む。

「酒だけではなく米も買い占めなければ」

米は 酒 の原 料でもあ るが、 新米 もほとんどを買い占めた」

誰もが幸村の作戦を理解する。

大坂城に籠もって戦うには兵糧が必要だ。

兵糧が尽きれば城は陥落する。一方、攻める方も

買い占めは商人に任せればいい。少なくなった米や酒は京の盗賊石川五左衛門に 略奪させる」

幸村の 発言に一番感心したのは小猿だったが黙っている。 そんな小猿を見つめながら静

「雪を待つ」

か

に言葉を収

める。

\* \* \*

もちろん家康 も兵糧を重視して大坂城に攻め入る戦術を構築する。 兵糧は あ る意味 武器 より

重要である。

豊臣は大坂で経済を握ったが、 江戸はまだ発展途上にあった。「徳川の兵力」 対 「豊臣の経

真

囲

丸

が

あった清水谷や安井道頓が掘削した二ツ井戸

済力」の戦いが始まる。

て  $\mathcal{O}$ V 0) 正 た。 外 月気 堀 水 は 分は 運 空堀だった。 が とっ 盛  $\lambda$ くの昔に消えていた。 に なり だが 大坂 その の経 外 済 側 力は に ところが は 安井道 ますます発展す 大坂 頓 が 《は冬の 掘 削 Ź。 L た道 降 .水量 頓 堀 が などの・ 少ない 大外 ので、 堀 復活 が 形 成され したも

寒 1 というよ ŋ 凍え るような本格的な冬が大坂を包み始める。 すでに伊賀者から徳川 軍 · の 情

報が届いている。

慎重 量な家康、 ならこんな時期にと思っていたが、 本気で攻めるつもりだ」

幸村に小猿が応じる。

雪を水代わりにすることは難 Ü \<u>`</u> 湧き水が豊富な場所にはそれなりの兵を配置させよ」

現場を確認していた三好清海入道に幸村が指示する。

馬 に は 高 麗 人参をたらふく食わせておけ。 馬用 0 わ らじの 用意に抜かりはない な?

一十分用意しました」

町民の食糧は?」

町 民 は よく 、心得 て お ŋ ´ます。 心 配 に は 及 八びませ ん

「雪が降ったら鎧は軽装にとの指示は徹底しているか」

「口うるさく指導しています」

、の湧き水は凍結しないそうです」

幸村 !の点検: 作業 が 確 実に進められた。このとき根来忍者が許されて天守に入ると幸村が驚く。

名前は知らないが顔見知りだった、

「九度山では世話になった」

幸村が深々と頭を下げる。

あ のとき、 お 前 の助 けが なかったら、 私はここにはいない」

しかし、根来忍者が感傷にふける幸村を制する。

「その 九度山で徳川軍を足止めしました。 奴らは進むことも退くこともできない状態です」

幸村は素直に頭を下げ直す。ありがたい!感謝する」

殿支えるつもりでしたが、 我らはもちろん 雑賀衆も今回 紀州 一の徳 は地震で混乱しております」 川の 攻撃に備え、 さらには大坂に向かい微力ながらも幸村

「大きな地震か!」

"津波もあって被害が広がっています」

「ここはまったく揺れなかった」

大坂 城 は 徳 Ш 0 攻撃だけでなく地震に も強 1 、城と聞 いてお ります」

幸村は根来忍者に近づき手を握る。

戦が済めば紀州に救援隊を派遣する。 それまで堪えてくれ 冬の陣

てどうしようもないからだ。

徳川 軍 Ò 情 報を伝えるため に参 っただけ。 それ で は

根

来忍者は

表情を変えずに応える。

根来忍者 が姿を消すと幸村は 消えた当たりに 向 カコ って大きな声をあげる。

そなたの心 」ゆき、 肝に銘じた!」

## \* \* \*

させる。 こともある。深夜から降 タイミングというものがある。 雨が降っても何とか鉄砲に着火できるが寒い冬となるとそうも行かない。 り始めた雪が天守閣はもちろん夜明けには大坂城の周 天候を予測することは困難だ。 一方踏み出せば後退できない りの 指先が 景色 を一 ,凍え 変

は感動 根来忍者の忍耐力と冷静さに加えて、 した か らか、 戦 ٧ì を前に して心構えを指示する。 地震に見舞われた地元の民を守るという気持ちに幸

敵 この言葉に秀頼 兵を皆殺 しに は せずに場合に もち ろん真 よっては 田十勇士 ŧ 助 首を傾 ける  $\mathcal{O}$ だ げ う。

心配するな。 徳 Ш 軍 か ら武器 を取 り上 一げる  $\mathcal{O}$ が 冒 的 だ。 奴らは武器より暖かい · お茶 の方が V

に決まってい . る

それなら殺してからでも ĮΊ いではな V か

頃過激なことを言わない秀頼が疑問を呈する。

日

違 ま ず。 やり方に ょ っては 徳川 軍を味方にできる か ŧ 知 れ な

秀頼が一言発する。

「甘い!」

こんなことを秀 頼 か ら言わ れたことの な い幸村が驚くが、 そこはふたり の友情が 修 復する。

「経済力で家康を倒せるのか」

自信

は

な

1

が

我

々

に

は

経

済

力

は

あ

る。

でも

兵力は

徳

川

軍

 $\mathcal{O}$ 

半分以下だ」

れる鉄 **趴砲を除** もうひとつ問 いてほとんどの武器が 題が あ ります。 旧態依然です。 武器を最新型にする必要があります。 信長がなぜ数々の戦 1 を制 紀州 した  $\mathcal{O}$ か ら供 カン 給さ 石 山

本願寺の攻撃を思い出してください」

秀 頼 0) 側 で 小 猿 が 瞬 きもせずに幸村を見 つめる。 秀吉 -の 様 々なやり方を吸収し た幸村 か 。 ら、

逆に小猿は幸村の戦術をすべて吸収しようとする。

返すことは 戦 1 不 は 可 五. 能 分 で 階 11 段 1 0 を 着実に 次 0 そし 歩ず してその つ 登 る覚悟 次 0 が 必要 戦 1 です」 が 勝 負。 関 ケ原 0 負 け を 気 に 取 ŋ

た。 石 秀頼 田 三成と違って幸 北 政 所 小 猿、 村 は自 真田 分が 十勇士、 天下を取 百 地三太夫、 るなど考え 猿飛 な 1 大猿 カュ らこそ、 根来衆 周 ŋ 雑賀衆 Ó 人 間 などなど。 か 5 共 感を得

まさしく家 気に攻めるには大坂城は余りにも堅牢な城。 康 0 戦 略 がそうです。 秋 0 陣、 春  $\mathcal{O}$ 余力を残して戦わなければ全滅の恐れがある。 陣 と段階を踏 んでじわじわと大坂城 に迫った。

0

陣

が

はっきりと確認できる。

次

 $\hat{O}$ 

家康から見れば大坂城はそう見える」

「敵の視点を分析しろと言うのだな

信長 秀吉は名将です。 そして家康はそれ以上です。この三人のやり方の中で一 番

V

い方法

を選択する」

「よく分かった。いつもながら深い読みをするな」

「必死度が勝負の分かれ目」

\* \* \*

朝には雪がやんで快晴で空気は澄み渡り天守閣から遠くの南や東方向を見渡すと徳川 軍

「すぐに攻めてくるはず」

幸 村 は 北 の空を確 認する。 どんよりとした分厚い · 雲 が 覆 って 1 る。

せざるを得 「本格的な冬が来る前 な カ 0 た。 家 に家 康 も歳 康 は を取 秋  $\mathcal{O}$ 0 陣 て大局観を失い を起こし たが、 用心 つつあるようだ」 しさが 邪魔をして今はこの時期 に攻撃

秀頼の緩みを幸村が制する。

「この寒さ、敵味方どちらにも与しません

しば らくすると徳川 0 陣営が かすむ。 炊き出しを始めたのだ

「朝飯を取っている」

実戦でどれだけ

0)

兵

を抜

け穴を使

0

て

最

前

線に送り込め

る

か、

楽し

みだ

を持

たせた。

「腹ごしらえか。そうするといよいよだな

秀頼 が <u>ニ</u>の 丸 三の 丸 に 視線 を移 7 暖 カン 1 朝 飯 を 食 0 て 1 る 兵士 一を確 認 す

ょ 食 事 が 済  $\lambda$ だ 者 カ 5 抜 け 穴 に · 潜 る よう 指 示 を 出 せ

穴 0 から 広さ長さを調 今回 出たらそ 0 作 戦 は 0 查 抜 鉄 して け穴 線 整備 を通 を引くと元の槍になるとい した。 0 て外堀遠 狭 1 0 < で  $\mathcal{O}$ 槍は 出 П 三本に か う武器を開 5 徳 分け Ш 軍 てそれぞれ を 討 発した。 つ奇襲攻撃だ。 そして刀の 0 中 に 鉄 すで 線 代 を わ 通 に ŋ 何 1 ん苦無い 一度も穴 7 抜

った。 真 田 + しかも抜 -勇士 0 指導の下これらの武器を使いこなすまでになり、 け 穴  $\mathcal{O}$ 中 は 暖 か \ \ \ \ にわ カコ . に秀頼 0 表 情 が 緩 to 0 すべ t 無理は、 ての兵がまるで忍者とな な 

先 立 0  $\mathcal{O}$ 辺 だ。 0 話 戦 に 1 な ると幸 は ゲ ] 村 ム で は は 1 な つも ٧ì 心  $\mathcal{O}$ に 配 真 に なる。 剣 味 が 欠け どうしても るの を幸村は 秀 頼 は 心配 奇 襲 す 作 Ź 戦 が 0) 重 秀 4 頼 ょ り は 自 興 信 味 に が

あふれた言葉を連発する。

「万全だ。いつでも抜け穴から出て攻撃できる」

な てあくまでもこの秀頼を天下人にさせるという目的 Ś 無 W É そ 近 のように V 抜 け穴 計算 が 最 して 後 幸 0 泱 村 戦 は  $\mathcal{O}$ 屈 ときに本当に 強 な兵を配 備 役に立 に揺らぎが L 7 1 る 0  $\mathcal{O}$ が、 ない か この と か V らだ。 う確 作 戦 認 0 本質 12 過ぎな はそうでは そ

やが 7 朝 飯  $\mathcal{O}$ カコ まど 0) 水 蒸 気  $\mathcal{O}$ かたまり が 消える。 つま ŋ 徳川 軍  $\mathcal{O}$ 進 軍 -が 始 まる。 幸村 が

秀

頼を厳 しく見つ め た ま ま命令を発 す ź。

 $\frac{1}{0}$ 丸 0 丸 0 騎 馬 隊 出 撃 !

ら森 幸村 ノ宮を目指 は 遠 眼 鏡 す。 を 放 ŋ 出 す と天守下 に 0 愛 息が 馬 を目指す。 飛び 乗ると軍扇を前方に向 け て本 丸か

すぐに

馬

0

鼻

か

ら白

V

出

る。

### \* \* \*

冑を身にまとっていた。それを知った幸村が総攻撃を仕掛ける。 は 村 積も は真 幸 村 率 田 った雪をもろともせずに向かってくる。 丸 いる騎馬隊は分散して多数 が あったところと四天王寺 の抜け穴の出 の中間 地 しか 点で真田十勇士 П Ľ から少し 徳川 離れたところで徳川 軍 は寒さを凌ぐため厚着を 0 ところが、 報告を待つ。さす 刃をまみえたとこ 軍 を待 が に して 徳川 つ。 甲 軍 幸

後退 ! 後 退

ろで信じられ

な

V

命令を下す。

0) 敵 間 を欺 に でく幸 抜 行穴 村 を 得 出 意 た精 の作 鋭 戦だが、 部 隊 が待ち構える。 世代交代を終えた徳川軍にその作 騎 馬隊だけだと思ってい -戦を理 た徳 |解できる将は Ш 軍 が 目  $\mathcal{O}$ V 前 な 大

どこから来 たのだ?」 軍

に

狼

狽える。

抜け穴で体力を温存してい た兵の動きは素早い。 すると後退を中止した騎馬隊や遅れ

て到着

チ

、ヤンスとばか

りと気負って

いた兵に幸村

の独特の

冗談を飛ばす。

この

戦

V

で

膨大

な凍

死者を出

L

た

のは

徳

Ш

軍だった。

方豊臣

軍

に

凍死

者は

V

な

カコ

0

た。

大

した足軽部隊

が

総

攻

く撃を仕

掛

け

このような 戦 1 が 抜 け 穴 0 出  $\square$ 付 近 で 繰 り広 げられ . る。 1 0 0 間 に か北 この空が 真 0 黒 に な

0

ている。冬将軍の到来だ。すかさず幸村が命令する。

「抜け穴の出口を塞げ!塞いだらすぐ撤退する!」

伝令 が 馬 に 乗ると鞭 を入れる。 すべ て 0 戦場 に 幸村 の命令を伝えるためだ。 さらに幸村が 追

加する。

深追いするな。 もはや敵は徳川ではない。 敵は今の今まで味方だった冬将 軍

「大坂城に戻って宴会だ!酒はいくらでもある!」

坂 と深 城やその 酒 は 許 周 され 辺 で な は カュ 燗 0 酒 た が が、 振 る 家 舞 康 b は n 撤 退 町 を選 民 カン ら脂  $\lambda$ だ。 が 大 0) 敗 0 た L た 魚 が が き寄付され 損失を見 最 れ た。 小 限 に 次 な 留  $\Diamond$ る 戦 た V 0 た

8 秀 頼 以 下 淀 君 t 喜 W だが 幸 村 B 北 政 所 は 引 うき締め を忘 れ な か 0 た。 もう冬の 陣 は な \ \ \

次

「家康が恥など考えずに引き上げた」

はどの

季

節

で

戦

1

が

始

ま

る

 $\mathcal{O}$ 

か、

幸

村

は

す

で

に先を考えてい

た。

秀頼がそんな幸村に酒を勧めると乱暴に振り払う。

「これからが大変だ」